



『東のエデン』と神聖かまってちゃん

アニメ『東のエデン』から読む大島宇宙人

—この国の王子になろうとしたニート

本文抜文

「若者の世代はもう開拓していく世界がなく、いろいろ作られているものを利用するつまりキュレートすることでしかクリエイトに参加できないのではないか？《神山監督》（略）閉塞感を突きやぶるのは、社会に溶け込こんで上がりを決め込んだおじさんでも座りを決め込んだ若者ではなくて、この社会でまだ何者にもなっていない「空白の存在」であるニートしかいない。」

語って欲しいバンドを語ってくれない音楽雑誌やライターに我々、は反旗をひるがえそう！

これは、神聖かまってちゃん評である。そ、ニートの。。

音楽の文脈を知っている音楽ライターが書かないから、

20代のks底辺が違った角度から「神聖かまってちゃん」評を紹介します。

今回は、『東のエデン』のニートを軸に、神聖かまってちゃんについて語っていきます。

アニメ『東のエデン』から読む大島宇宙人
———この国の王子になろうとしたニート

深夜に喫茶店なんかで無駄話して、みんなが笑い転げているようなネタが出て、それを持ち帰って自分の連載にそのまましちゃう人は、ミリオンセラーになっている。でも、澄ましちゃって、翌週の連載に投入しない人は、売れなくなっちゃうんですよ。

(『月刊 アニメスタイル』一一年 第三号)

マンガ家「羽海野チカ」（『ハチミツとクロバー』『3月のライオン』の作者）がアニメ監督「神山健治」に言った言葉だ。

音楽レビュー書くとき、「音楽はもう売上が下がって下がって、エトセトラエトセトラ」という常套句は溢れているのでウンザリしている。でも、それを音楽ライターやリスナーがブログで繰り返し繰り返し持ちだしてくるのは理由があると思う。ロックバンドがまた日本のお茶の間でメインストリームとして返り咲くことをを願っているからだ。「ニッポンは、第二次世界大戦にゼロ戦を発明をしてブイブイ言わせていた。いつまでも続かず、次第に国力は落ちてしまい、戦争終了後はニッポンは何もない焼け野原になってしまう。しかし、戦後、ニッポンは高度経済成長を遂げることになり、『復活』したのダー！」という日本を語る時、定番の「物語」があるが、それに似ている。

CD売上が好調のときを戦争中とし、戦後なにもなくなってしまったという日本のことをCD売上が下がった現代に例えているのだ。そして来るべきロックバンドシーン復活を高度経済成長に重ね合わせている。

とはいえ、この閉塞感はなんなんだ。最近、ロック勢は「アイドルこそ評価すべし」みたいなことを訴えている感じが必要以上にする。それだけもうロックシーンを更新することができないということなのか。まだ成熟しきってないアイドルシーンの方が入り込める余地があるということなのだろうなと思う。

「アイドルをちゃんと評価することこそロックリスナーとして音楽指数が高い証である」という最近の風潮がある。

「アイドルをちゃんと評価することこそロックリスナーとして音楽指数が高い証である」という最近の風潮がある。

心の狭いぼくはなんだかロックシーンからはじき飛ばされている気分だ。アイドルが気に入らないのだからしょうがない。現実世界で疎外感があるからロックに救われたのに、そこにいたら次はロック好きという枠のなかで疎外感だ。「わたし、音楽なんでも聴く。ロックもアニソンもアイドルもボカロもヴィジュアル系も好きだよ」とかドヤ顔で言われたときには、ああアナタはそういう感じなんですねなるほどなるほど、、、と思考停止。「ロック好きはみんな仲間だよ、同じファン同士で優劣なんてないよ、楽しもうよ」と言われれば、ああそうか、きみには分からないんだね、優劣なんてないという意味を表明したことできみ自身が上に立ったということ、と友蔵心の一句を読む。

自意識過剰といえはそれまでなのだけれど、つらい。とはいえ、そう感じてしまうのは、自分が誰よりもその音楽指数を、優劣を気にしているからだ。↓

とはいえ、そう感じてしまうのは、自分が誰よりもその音楽指数を、優劣を気にしているからだ。

自分が他のだれよりもこのバンドのことを分かっているんだ、という想いは、人と比べて勝つことで保たれる。たとえ勝たなくても、周りと比べてそこそこ自分はイケる、と思えば自分の心は傷付かない。

これは自意識まみれの自分が勝手に思っていることなのは分かっている。でもそういう苦しい空気に風穴を開けてくれるのがロックだろう。せめて、「アイドルを評価することがロックの最先端でありそれを分からない奴は弱い」というこの謎のゲームから解放してくれ。その「空気」が壊れないとぼくは大きく息を吸えない。

別にどの音楽もたいして偉くねえよ、でも、ロックンロールはどの音楽よりも凄いんだ、ということを今この時代に証明してくれたら謎のゲームから解き放たれると思う。だれかなんとかしてくれよ、という感じだ。

「時代の空気」を題材にした作品がある。神山健治監督のアニメ『東のエデン』だ。↓



「時代の空気」を題材にした作品がある。神山健治監督のアニメ『東のエデン』だ。〇九年テレビで放映がスタート、全十一話、一〇年に続編である劇場版二作が公開される。

キャッチコピーは「この国の”空気”に戦いを挑んだひとりの男の子と、彼を見守った女の子のたった11日間の物語」だ。主題歌はオアシスの『FALLING DOWN』。このことから通常のテレビアニメとはちがった雰囲気だ。

設定は、二〇一〇年一月に日本各地に一〇発のミサイルが落下するテロが起こる。奇跡的に1人の犠牲者も出なかったこともあり、最初あった危機意識を次第に人々は忘れていく。それから三ヵ月後、大学生の「森美咲」はワシントンD.C.で記憶喪失となった日本人青年「滝沢朗」と出会う。滝沢はセレソングームに参加しており、一〇〇億円を使って閉塞感漂う日本を救えということに課せられていて、十二人のうち最初にゴールした者以外は殺されてしまう。携帯電話（ノブレス携帯）を使えば、要求に応じて消費金額があり、その範囲内なら国家権力を動かすことも可能である。

興味深い点は、社会的にけしからんとされる「ニート」を肯定的に扱ったところだ。↓



興味深い点は、社会的にけしからんとされる「ニート」を肯定的に扱ったところだ。劇中で、滝沢は引きこもりの青年「パンツくん」と出会い、「おまえは、上の世代に抗議するために引きこもったんだろう」と言う。

高校生でも社会人でもない。空白の存在のニート。社会に出てないからこそ社会に染まっておらず、勉強に追われている学生でもないことから、社会やその時代の空気に対して敏感に反応できるのはニートと学生だ。主にアニメ視聴者と思われているのは学生とニートであるから、若者に見せるために作った物語であると考えられる。そして、劇中で登場人物が繰り返す「ニート」という言葉は物語の要素とともにそれはアニメ視聴者を意識したものだ。ネットではアニメ好きということを表明するときときおり自身を「おれはニート」と自虐するからだ。それに、当時、アニメのなかでニートという言葉を連呼するアニメはなかった（今もないと思う）ので、ギミックとしても機能した。

それらの要素を使って、アニメ視聴者に閉塞感を打ち破ろうとする登場キャラクターが自分とかけ離れた存在ではないということを示した。

その若者がもし一〇〇億円を自由に使っていいと言われたら、どう行動して時代の閉塞感を打ち破るのかを描いていた。↓

その若者がもし一〇〇億円を自由に使っていいと言われたら、どう行動して時代の閉塞感を打ち破るのかを描いていた。

なぜノートを物語の重要な要素にしたのか、神山監督は言う。会社に引きこもりだったというオタク青年がいて、いたずら書きのようにペラ紙一枚の企画書を上司に見つかるようにわざとコピー機に置いていた。気づいて怒った上司が神山監督に報告し、内容を見ると、今初音ミクが人気なのでボーカロイドが歌で対決するアニメを神山健治と押井守が監督するべきだ、というもので提案書というべきものだった。

神山監督はなぜか怒れなかったという。普通は「俺様が書いた」「俺が監督する」と書くし、いままでのアニメ業界だとそうだった。どう地殻変動が起きたのか。それは彼らの世代はもう開拓していく世界がなく、いろいろ作られているものを利用するつまりキュレートすることでしかクリエイトに参加できないから、彼はああいう訴え方をしたのではないか、と解析した。だから、説教くさいものではなく、今の若者を肯定してその先を描くアニメにしたという。

テレビアニメ終盤、再びミサイル攻撃が東京に降る。↓

テレビアニメ終盤、再びミサイル攻撃が東京に降る。

滝沢はノブレス携帯を使って二万人のニートを集めて、ミサイル攻撃の被害を最小限にする案はないか求める。そして、「ニートを並列で繋いでやれば強い」と言う。上がりを決め込んだおじさん世代に勝つのは難しいが、若い世代が座りを決め込むのではなく連帯していけば突き崩せるかもしれないという読み方をした。数は力だ。ニートは個として弱い、個を繋げば力を生む。

閉塞感を突きやぶるのは、社会に溶け込こんで上がりを決め込んだおじさんでも座りを決め込んだ若者ではなくて、この社会でまだ何者にもなっていない「空白の存在」であるニートしかいない。ここでのニートはドン詰まりの若者でもある。

この作品で描かれたことをロックの最前線で行っているのは神聖かまってちゃんだけだ。↓

この作品で描かれたことをロックの最前線で行っているのは神聖かまってちゃんだけだ。

ネットを利用してリスナーと繋がっているバンドはたくさんいるが、神聖かまってちゃんのようにネットを介してリスナーと繋がって、それが心中するレベルで強く結びついているバンドは他にいない。ニートの心に入り込むロックンロールは異常な熱量をもっている。神聖かまってちゃん自体にニート精神があり、異常な熱量があるからそういう曲を作れる。それは、冒頭に書いた羽海野チカのそれをの子がやっているからだろう。

『東のエデン』で神山監督が描いた、ニートは個だと弱い繋がると強いということは神聖かまってちゃんに結びつく。↓

『東のエデン』で神山監督が描いた、ニートは個だと弱い繋がるとう強いということ
は神聖かまってちゃんに結びつく。

彼らのドラムみさこはインターネットで出会っている。そして、インターネット投票
で決まるサマーソニック新人枠に、ネットの奥にいるニート(ドン詰まりの人間たち)に
投票を呼びかけた結果、出演することが決まる。彼らの快進撃はこのサマーソニックの
伝説アクトから始まる。

何者でもなかったニート(の子)が何者でもなかったニート(リスナー)とネットを
駆使して繋がったことで力を生み、の子自身の閉塞感を突破させることとなった。それ
はやがて、ロックシーンの風穴をこじ開ける存在感になった。

いまのこの音楽シーンに漂う閉塞感を破る最先端にいるのは神聖かまってちゃん(空
白の存在を背負ったバンド)である。

うおお

アニメ『東のエデン』から読む大島宇宙人

<http://p.booklog.jp/book/82321>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ